

マルコによる福音書 第2章1～12節

1 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、2 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、3 四人の男が中風の人を運んで来た。4 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。5 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。6 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。7 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆(ぼうとく)している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」8 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。9 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易(やさ)しいか。10 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の目を見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

「主イエスに出会った人々 ③ ～中風(ちゅうぶ)の人と四人の仲間」

今週も、主イエスが復活された週の初めの主の日の朝に、共に礼拝をお捧げ出来ますことを感謝しています。

主イエスがこの地上にお生まれくださり、成長され、歩まれた中で、まことに豊かな出会いがありました。その時、その人の一生を決定する出会いが起こったのです。主イエスもまた、このような人々との出会いを大切にしてくださいました。そこで、私どもも、そのような主イエスとの出会いの物語に触れ、自分たちも同じように主イエスに出会えることを願いつつ、そのような出会いの意味を尋ねたいと願っています。

本日の箇所には、中風の人が登場します。「中風」とは、脳血管障害の後遺症である半

身不随、片まひ、言語障害、手足の痺(しび)れや麻痺(まひ)などを指す言葉として用いられています。中氣、卒中とも言います。死は免(まぬか)れたものの、体が不自由になってしまい、その後の生活は大変になってしまいます。

ですから、聖書に登場するこの人も、大変辛い、苦しい思いをしてきたことと思います。

その中風の人を、四人の男の人が、主イエスの所に連れて来たのです。主イエスに癒してもらうためです。主イエスならきっと癒してくださるに違いないと信じて連れて来たのでしょう。しかし、その時、主イエスがいらっしゃった家には、大勢の人が集まっていて、戸口の辺りまですきまもないほどになっていたのです。群衆に阻まれて、主イエスの近くに行くことができなかつたのです。そこで、この四人の取った行動が驚きです。主イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床(とこ)をつり降ろしたのです。ずいぶん乱暴なことをしたものです。他の人の家の屋根を勝手に剥(は)がしたのです。当時のユダヤの家では、比較的簡単に屋根に穴をあけることが出来たそうです。とは言っても、無茶なことをしたものです。剥(は)がした屋根材がばらばら落ちてきたことでしょう。主イエスに叱られても仕方がなかつたでしょう。

しかし、主イエスはこの人たちの、人の迷惑も考えない、無茶なやり方を責めておられないのです。それどころが、主イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われたのです。ここで、「主イエスはその人たちの信仰を見て」と言われています。その人たちとは、中風の人を運んで来て、屋根から吊り下ろした四人です。この四人の信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われたのです。

私どもは、救ってもらうためには、信仰がなければならぬと考えます。信じれば救われると考えています。言い換えれば、信じなければ、どうしようもない。信じる事が出来ない人は救われぬと考えています。しかし、この場面では、中風の人が、「主よ、わたしは信じます」と言った訳ではありません。しかし、中風の人々の罪が赦されると主イエスはおっしゃったのです。中風の人々は、彼を運んで来てくれた四人の信仰によって罪赦され、癒されたのです。

ある福祉施設で働いているキリスト者の方がこんなことを言っていたそうです。その施設では、重い障害を負った子どもたちが生活しているそうです。中には口もきけない子もいるそうです。こう言っているのです。「子どもたちは障害を負っていますが、幸せです。皆が親切にしてくれるから、肉体的には幸せです。けれども、この子たちの魂は

救われるのでしょうか。」そう言っていたそうです。

私どもは、救われるためには、礼拝を捧げ、賛美を捧げ、聖書の言葉を聴き、牧師の説教を聴く。そして、自覚的に信仰告白することが必要だと考えています。特に、私どものようなバプテスト派では、幼児洗礼を認めません。無自覚な幼子にバプテスマを授けることをしません。では、障害を負っていて、教会に来れない人、聖書の言葉の意味を理解できない人は救われないのでしょうか。主イエスと出会うことは出来ないのでしょうか。

本日の聖書に登場する中風の人々の周りにいた人たちは、そのようには考えなかったのです。本人が歩いて行けなければ、主イエスにお会いするために、私たちが運んで行ってあげる。とにかく、主イエスの所に運んで行ってあげれば、主イエスが何とかしてくださるに違いない。主イエスにひたすら依り頼むだけだ。この人のために、何とかしてあげたい。そのような四人の愛の中に、屋根に穴を開けてでも、主イエスに何とかしてもらいたいという思いに、主イエスはお応えくださったのです。主イエスはそこにご自身に対する四人の信仰を見出してくださったのです。

ここで私どもが改めて知るのとは、私どももまた、他者のために信じるということが許されているということです。私どもの信仰は、自分自身を救うだけでなく、自分以外をも救うことが出来るのです。自分のことを忘れてでも、他の人の救いのために祈ることを、その思いを、主イエスは快くお受けくださり、その人とお会いくださり、救いを与えてくださるのです。

私どもは、自分の救いだけでなく、愛する家族、友の救いのためにも祈っています。私どものその信仰を主イエスは御覧になって、私どもが祈っている人たちも、主イエスは救いを与えてくださるのです。中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われたように、私どもの愛する人たちにも、そのようにおっしゃってください、救いをもたらしてくださるのです。

ここでもう一つ注目しておきたいことがあります。主イエスは、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われ、その人の罪を赦してくださいました。ただし、この人は、病を癒していただきたいとは思っていたでしょうが、主イエスに自分の罪を赦して頂きたいとは思っていなかったであろうということです。

しかし、この中風だった人は、この主イエスの言葉を頂いて、罪赦され、救われたと自覚すると同時に、自分は神の前では、罪人であったことに気付かされたのです。自分は病気だった。そのことにはよく分かっていた。でも、赦して頂けなければならない罪

人であるという自覚はなかった。しかし、主イエスによって、罪赦され、病も癒して頂いた。その時初めて、自分が赦して頂けなければ救われない罪人であることに気付かされた。そのことを、この中風だった人は深く感謝したことでしょう。

私どもは、自分の罪に気付き、悔い改めて、神に立ち帰って、罪赦されると考えています。確かに、罪に気付くこと、悔い改めること、神に立ち帰ることは、大切なことです。しかし、本日の聖書の記事の中であるように、私どもが救われる順序は、実は、逆なのです。主イエスの赦し、「あなたの罪は赦される」または、「あなたの罪は赦された」との赦しの宣言が初めにあって、私どもは罪赦され、救われるのです。それと同時に、自分の罪深さに気付かされるのです。

本日の聖書にありますように、主イエスを求める者の思いを超えて、主イエスは近づいてくださり、出会ってくださり、赦しの權威の言葉をかけてくださるのです。ここに主イエスとの出会いの典型があるのです。

主イエスと出会うという事は、主イエスの力に打たれるということでもあります。しかも、「起き上がりなさい」との言葉に促され、罪から解放され、自由になるのです。

そして、自分が罪人であったことを知るという事は、自分が受けるべき審きを認める事です。主イエスが十字架の上で贖ってくださった審きを認める事です。その点では、実に厳しい事なのです。

主イエスにお会いするという事は、罪赦される前の自分の姿を見、そこから解放され、自由になり、救いを体験することです。しかも、私どもを主イエスに導いてくださる信仰、言い換えれば、自分だけでなく、自分の愛する人も救って頂きたいと祈り願う信仰は、私どもが祈っている人と共に、救いに与る道を開いてくれるのです。ですから、私どもは、益々、愛する人と共に与る救いのために祈ってまいりましょう。

祈りを捧げます。

主イエス・キリストの父なる神よ。あなたは四人の仲間の信仰によって、中風の人を救い、癒してくださいました。私どもも愛する人たちのために祈ります。どうか、私どもに救いを与えてください。そして、あなたが、私どもが自覚する前に赦しの宣言をしてくださることを感謝します。どうか、主イエスとの出会いを、これからも大切に、信仰の確信をしっかりと持ち続け、あなたに従って歩ませてください。一人一人の信仰の歩みを、豊かにお導きください。主の御名によって祈ります。アーメン。